

入選

テーマ2..誰かのために、私ができること
「善を行う勇氣」

滋賀県・近江兄弟社高等学校3年 小西 琉偉

先月、私は駅のホームで白杖を持った男性が段差につまずき転ぶのを目にした。人通りは多く、何人もの人が足早に通り過ぎる中で、男性は一瞬迷子のようにも見た。胸の奥がざわめき、私は思わず駆け寄った。

「大丈夫ですか。もしよかったですら近くまでサポートしますよ。」

男性は一瞬驚いた表情を見せたが、すぐにほっとしたように息をつき、「すいません、ありがとうございます。ではその郵便局までお願いできますか。」と答えた。私は笑顔で応じ、歩調を合わせてゆっくり歩き始めた。ホームの雑踏の音、遠くで発車する電車の音、足元に響く靴音―すべてが男性にとって不安の中の種だったのだろうと想像した。

道中、男性は目の不自由さゆえの、生活の不安を語ってくれた。三〇代半ば、緑内障と診断され視力が徐々に失われていったという。「最近あまり外に出られなくて、今日は久しぶりの外出です。」と少しささやく声には、緊張と覚悟が入り混じっていた。視界が狭くなる感覚や周囲の音、人混みによるストレス―その一つ一つが胸に響き、私の心を締め付けた。私も子どもの頃から視力が弱く、メガネなしでは町を歩くのが不安だった。完全に目が見えない状況を想像するだけで、ぞっとした。

目的地に着くと、男性は「知らない土地でとても不安でした。あなたがいてくれたおかげで安心して歩けました。ありがとうございます。」と言ってくれた。その言葉に胸が温かく満たされ、勇氣を出して声をかけた過去の自分を心の中でそっと褒めた。同時に、盲目の方がもっと安心して暮らせる社会を作りたいという思いが芽生えた。

しかし、私が彼に声をかけるまでに迷いもあったのも事実だ。「どう

せ自分なんて役に立たない」「話しかけるだけ迷惑だ」と心のどこかでつぶやき、立ち去ろうとする自分もいた。その時、ふとある先生が教えてくれた聖書の一節を思い出した。

「人はなすべき善を知りながら、それを行わないのは、その人にとって罪です。」

私は善を行ふべきだと認識しつつ、自分の勇氣のなさを隠すために「役に立てない」と思い込もうとしていたのだ。これまでも同じように善から背を向けてしまった経験が何度もある。しかし、この言葉と出会い、自分の弱さと向き合うことで、善に正直に動けるようになった。「思い立ったが吉日」の通り、ほんの少しの勇氣で行動することが誰かの安心につながると気づいた。

この聖書の言葉は、現代を生きる私たちにとって大切な意味を宿している。忙しい日々の中で、目の前の困りごとには気づいても、「時間がない」「自分には無理だ」と言い訳してしまうことが多い。しかし、少しの勇氣で誰かの世界を変えられるかもしれない。千里の道も一歩から。大きな目標もまず小さな一歩から始まる。周囲が動かないなら、自分が最初の一步を担いたい。周りの一人として責任を薄めるのではなく、当事者になることが福祉の原点ではないだろうか。

私は今、「スタートアップラボ」という学生起業団体の代表として活動している。「スタートアップラボ」は、将来起業を目指す学生が自らのアイデアを実現するために取り組む組織だ。私は将来、新しい技術を活用して、盲目の方でも健常者と同じように安心して暮らせる社会を目指した製品を開発したい。そして、あの日出会った男性に、私の発明が届くまで、「福祉の道」を歩み続けたい。

あの日、私はただ男性を郵便局まで送っただけかもしれない。しかし、そのささやかな一歩が、これからの私の歩みを変えた。聖書の言葉を胸に、「今できることは何か」と考える習慣をつけ、誰かの安心や笑顔のきっかけを生み出せる人になりたい。周囲の目や失敗への恐れにとらわれず、出会った人に温かい手を差し伸べる。その積み重ねが、やがてすべての人に開かれた福祉の未来につながると信じている。